

図書館便り

# ブーゲンハーゲン Bugenhagen

2019年度秋号

ルーテル学院大学図書館

2019. 10. 31 発行

ブーゲンハーゲン  
\*Bugenhagen というタイトルは？ ルターの協力者で、宗教改革を推進した人物から名付けました。

今年で本誌 10 周年♪「Bugenhagen」について上に簡単な説明がありますが、よく知らない方も多と思います。そこで今号は彼のことについて詳しく紹介していきます。(鳥居)

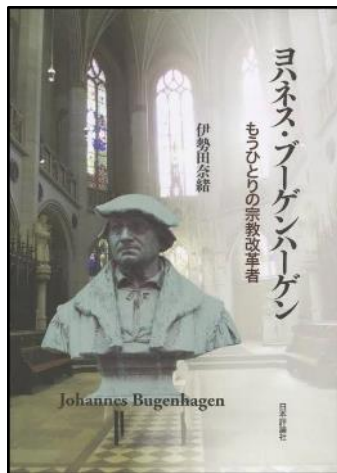
## ルターに出会うまで

ポンメルン公国（現在のポーランド）に市参事会員の子として生まれた彼は、大学を卒業した後、ラテン語学校の教師として、聖書の授業を担当しました。教育者であり、その後牧会者、神学者ともなったブーゲンハーゲンは当時、教会のあり方とキリスト者の生き方について真剣に問うていました。

そんな中、1520年に発表された、ルターの『教会のパピロン虜囚』（宗教改革の三大文書のひとつ。ローマ・カトリック教会の sacrament 論を批判したもの）に出会います。これによりルターの思想に感銘を受け、ルターを支持するようになります。

## 「ブーゲンハーゲン」とは・・・

(Johannes Bugenhagen:1485-1558)



<<参考文献>>

『ヨハネス・ブーゲンハーゲン—もうひとりの宗教改革者』  
伊勢田奈緒著 日本評論社 2017年  
(請求記号：192.5//I 69-1)

## そして改革者になる

翌年の 1521 年には全てをなげうってルターのいるヴィッテンベルクへ旅立ちます。ヴィッテンベルク大学へ入学した彼は、神学を学びつつ自室での詩篇の講義が好評を得、学生のみならず大学の教師として講義を受け持ち、早くも改革者の仲間として受け入れられます。

その後ヴィッテンベルク市教会の主任牧師に任命され、後にルターの結婚式や葬儀の指揮を任されるほど、ルターから強く信頼されるようになりました。



☆ルター



☆ブーゲンハーゲン

## 『北の使徒』

こうしてルターの片腕となり、改革者となった彼はヴィッテンベルクを中心に制度作りや組織化に力をいれ、ハンブルクやリューベックなどのドイツ北部、北欧へ強い影響をもたらしました。さらに自らもルター訳聖書を元に、北部ドイツで使われていた低地ドイツ語訳のリューベック聖書（ブーゲンハーゲン聖書）を刊行し、ルターの教えを広げること努めます。

やがてルター派を支持するデンマーク王クリスチャン 3 世に招かれて王の戴冠式を執り行い、デンマーク・ノルウェー王国の宗教改革を整えていきました。



☆宗教改革時代のブーゲンハーゲン活動地図

裏に続く

## 『ドイツ国民学校の父』

教育者でもあった彼はルターが唱えた教育思想にも共感を持ちます。すなわち、神の教えを理解するためにも聖書が読めることは不可欠であり、全ての者に教育を受けさせる必要があると考えたのです。そこで彼は初等教育の充実を目指します。男女の差、貧富の差なく、またラテン語を学べない者のためにも自国語の学校で学べるように改革を進めました。

ブーゲンハーゲンは、キリスト教を学び、信仰を身につけることで、人々は幸福に生きることができると信じていたのです。

### <参考文献>

- ・『地図で学ぶ宗教改革』ティム・ダウリー著、青木義紀訳 いのちのことば社 2017年 (請求記号：192.5//D89)
- ・『ルターと宗教改革事典』日本ルーテル神学大学ルター研究所編 教文館 1995年 (請求記号：198.352//N77-6)
- ・『ルターとバルト』倉松功著 ヨルダン社 1988年 (請求記号：198.352//Ku53-6)



## 創刊 10 周年 Bugenhagen 誕生秘話その②

創刊準備時、新しい図書館報のタイトルを何にするか、図書館委員の教職員で頭を悩ませていました。そんな時、偶然教文館から届いたばかりの1冊のブーゲンハーゲンの研究書に目が止まりました。当時不勉強でどのような人物なのか知らなかったのですが、とにかく“ブーゲンハーゲン”と口に出して言うと弾むような、語感が良いのいいと思いました。

とはいえ、宗教改革者の名前をこのような軽い広報誌に冠してよいものか不安な面もあり、当時のルター研究所所長の鈴木浩先生に伺ったところ、「いいじゃないですか〜」と明るいひと押し♪正式に採用となりました。

ブーゲンハーゲンは、RPGのファイナルファンタジーに登場するキャラクターの名前にもあるようで、それを思い出す方も多いかも知れませんが、ともあれ、今では皆さんに親しんで頂き、良かったなと思います。(矢野)



## 連載・とサポ文学館 第七回『沈黙』 遠藤周作 著

～図書館サポーター（とサポ）による、文学にまつわるリレーエッセイ～

今回担当のA君は、この本に出会うまではキリスト教に馴染みは無かったそうです。丁度ルーテルへの入学時期とこの本との出会いも重なり、座右の書となったとのこと。本でも人でも環境でも、出遭ってすごい。その出遭いの意味を考え続けるA君の思索の深まりを感じます。(矢野)



『沈黙』遠藤周作著 新潮社 1966年 (請求記号：913.6||E59)  
※映画のDVDも所蔵あります。  
(請求記号：7||VD-1268)

この小説の主人公は、キリスト教禁制下の日本で布教を目指す二人のポルトガル神父です。彼らは日本に潜入し布教を行おうとしますが、そこでキリスト教の無力さや矛盾を目の当たりにし、次第に自らの信仰に揺らぎと不安を持ち始めます。

この作品は、信仰や信じることがテーマになっています。ですが、決してその信仰を貫くことを正義としては描いていません。むしろ、信仰を貫くことのできない弱い人達を切り捨てることなく、寄り添い、理解しようとする作品であると思います。僕は今までこのような作品に出会ったことがなく、そうした「許し」に似た優しさに強く惹かれました。

「魅力のあるもの、美しいものに心ひかれるなら、それは誰だってできることだった。そんなものは愛ではなかった。色あせて、襤褸のようになった人間と人生を棄てぬことが愛だった。」

これは、主人公の神父が、自らのある行動を省みた時に発した言葉です。僕は、この言葉がとても美しいと思いました。

果たして、主人公の二人の神父は、最後まで信仰を抱き続けることができるのでしょうか。そして、本当の信仰とは一体何なのでしょう。その結末は、是非ご自身で確かめてみて下さい。(A・R 福祉相談援助コース3年)

編集後記：今号はブーゲンハーゲンの特集を組みました。調べる中で、1冊の本をきっかけに彼の人生が変わったということが印象深かったです。ルターの本に出会ったのが35歳の時。そこからこれほどの改革を進めた活力は本当にすごい。

今回のとサポ文学館もそうでしたが、こんな風に本との素敵な出会いを経験したいものですね。(鳥居)

Bugenhagen No. 44

2019年10月31日発行

編集・発行 ルーテル学院大学図書館

〒181-0015 三鷹市大沢 3-10-20

TEL/FAX 0422-31-4814

Twitter 公式アカウント：@Luther\_Lib

図書館ウェブサイト URL：http://www.luther.ac.jp/library/